

## 「体験の言語化」多分野への展開とその可能性

企画者・話題提供者：兵藤智佳（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）

話題提供者：佐野香織（早稲田大学日本語教育研究センター）

話題提供者：菅新汰（早稲田大学社会学部3年科目TA学生）

指定討論者：和栗百恵（福岡女子大学国際文理学部）

司会者：河井亨（立命館大学スポーツ健康科学部）

### 要旨

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)は、2014年度～2016年度に「体験の言語化」を開発し、全学の学生が受講できる授業として実践を続けてきた（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター、2016）。現在、この大学生を対象として開発した「体験の言語化」の理念や手法は、日本語教員の学びや高校生の体験型学習への応用として広がりを見せている。本企画セッションでは、それらの事例報告を足がかりとして、「体験の言語化」がさらに多様な対象や分野に展開する可能性と課題、そして、その意義についての議論を深めたい。

### はじめに

「体験の言語化」は大学生がボランティア、サークル活動、留学、アルバイト等の多様な体験を自分の言葉で語り、体験から社会の課題を発見することを目指す授業である。現在、早稲田大学で提供している「体験の言語化」は体系化されたクォーター8回の授業である、しかし、体験を言語化し、語ることで体験の意味を紡ぎだす実践は、特定の対象を越えた普遍的な教育的価値を秘めている。人は言葉によって世界を理解し、対峙するという意味では、体験を言語化する力はあらゆる人に必要とされる能力でもある。

### 企画概要

そこで、本企画では、まず科目「体験の言語化」開発者（兵藤）より、授業開発のプロセスや方法論について解説を行う。その上で、さらなる展開の事例として話題提供者①（佐野）より「語学教育を担当する教員（日本語教育等）を対象とした実践の事例紹介を行う。この実践の背景には、体験を基礎として自分と社会とのつながりを考える日本語教育の実践を模索するためには、教員たちが自ら自身の体験を省察し、語る実践による学

びが不可欠であるという問題意識がある。

次に、話題提供者②（菅）より科目「体験の言語化」を受講し、TAとして教育経験を重ねた大学生による「高校生向け体験の言語化」の事例紹介を行う。この実践は、事前にトレーニングを受けた上でガイドブックを参照し、90分のワークショップ形式で行われた。

これらの事例報告を受けて、指定討論者（和栗）が、国内外の大学教育における体験学習やふりかえりに関する研究者、かつ実践家の立場から体験を言語化する教育実践について批判的な分析と考察を行う。特に、方法論や実践における可能性のみならず、展開していく上で「危うさ」を含めた課題についても提起する。

以上の報告や発表後、本企画セッションの後半は、司会者とともに参加者と発表者が双方向で議論を深める場としたい。

### おわりに

「体験の言語化」の開発背景にあった問題意識は、大学生が社会で起きている出来事を自分ごととして実感できないという「当事者意識の欠如」であった。それは、自分と社会との分断であり、その分断は、現在、多くの人々が抱える課題でもある。「体験の言語化」は、自分と社会とのつながりを見出すための実践である。だからこそ、より多様な場における分断を超えるための創造的試みが意義を持ち、それらの実践によって個人の変容とともに社会変革への可能性をもたらすことが期待される。

### 参考文献

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（編）「体験の言語化」成文堂 2016年  
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（編）「体験の言語化ガイドブック」成文堂 2018年